



▲ハグロトンボの生息地。ハグロトンボやアオスジアゲハが溪流に飛来していた。=2008年7月 箕面市 筆者撮影

褐色・悪臭の液（かね）に五倍子（ふし タンニン剤）の粉をつけて歯につける。……江戸時代には結婚した婦人はすべて行つた。かねつけ。はごろめ。』とある。

また、このトンボを詠んだ次のような句がある。

橋に来てお羽黒とんぼ翅（はね）たたむ 服部寿恵子

水影のおはぐろとんぼ翅ひらく 白石水可（大野雜草子編者1
990「動物俳句を詠むために」博

昨年の7月下旬 小糸川上流の渓谷を訪れた。溪流を歩き始めると涼しい風がほほをなでた。しかし、強い日差しのせいか虫や鳥はほとんど姿を現さなかつた。川面じゅうに藻が繁茂していて、一匹のアオスジアゲハが水を吸つていた。そこに、ハグロトンボが日陰の岸辺から水面すれすれに飛んで、川面の中央の落ち葉に止まつた。太陽の熱射を浴びて、はねを閉じ、じつとしているが、ときどき尾を上げ、はねをばらばらに広げる。このトンボは大型で、眼が金魚の出目金のように飛び出していて、真っ黒なヘリコプターのようなのはねを4枚つけている。腹は金緑色のビニールで覆われた針金のように細長い。普段、日陰で見かけることが多かつたので、その光景は珍しい

かずさの博物誌

ハグロトンボ ～黒いはねをもつ 大型のカワトンボ～

文・写真／成田篤彦

と同時に清々しい印象があつた。

谷津田の流れ、小櫃川や小糸川など
で普通に見られる。また、先々月、
木更津市郷土博物館の裏山にある小
さな祠のある森の中で飛んでいた。
彼らの未熟なものは羽化した水域
から離れ、周辺の林内で観察される
そうだ。初夏に神社などの森影に見
られるのはこうした未熟なハグロト
ンボだという。成熟すると水辺にも
わたりをもつようになる。交尾を終
えた雌は水生植物の茎や葉に産卵す
る。まれに水中にもぐって産卵する
こともあるそうだ。ヤゴは水草の間
で生活し、カやエスリカの幼虫など
をえさにする。

れはりをもつようになる。交尾を終えた雌は水生植物の茎や葉に産卵する。まれに水中にもぐつて産卵することもあるそうだ。ヤゴは水草の間で生活し、カブトムシやエスリカの幼虫などをえさにする。

グロやオハグロトンボ、アネサマト
ンボという（川名興一 1969・千葉県の
動物方言第1報ガリ版刷）。ちなみに、
時代劇で歯を黒く染めた婦人を見た
ことがあるでしょう。オハグロとは

「お歯黒」の意味である。数十年前、東北地方に住んでいた頃、歯を黒く

十あまりおはぐろとんぼ行きそろ
ふ 若灯（角川書店編1979）「図説俳
句大歳時記秋」角川書店



▲若いハグロトンボ。未熟なものは森影にすむ
=2006年6月 木更津市 筆者撮影

それはさておき、このトンボは群れになる性質があるが、数匹同時に飛んでいる姿はあまり見られなくなつた。かずさだけでなく、他地域でも減少しているそうだ。

レッドデータブックに掲載されてゐる希少種が注目されがちであるが、かずさの自然を成り立たせている普通の種が減少することも、環境が変化していいる指標となり見逃してはならないことだと思う。

皆、稻作を生業としていたので、川の近くに住居があり、子供のころやお盆休みに帰郷した時に川で泳ぎ、魚釣りをして楽しんだはずである。大型でゆつたりと飛ぶこのトンボを見ると故郷の懐かしい日々を思い出すので、これらの俳句はいずれも安いだ気分にさせるのではないだろうか。

十あまりおはぐろとんぼ行きそろ
ふ 若灯（角川書店編1979）「図説俳
句大歳時記秋」角川書店

○千葉県（2002）千葉県の自然誌本編6 〔参考文献〕